

2校目となるH中学校の1年目は、3年生の「副担任」というポジションだった。実は、最初は学級担任だった。それが変更となり4月1日の職員会議を迎えた。さすがに、この前まで小学校の教師だった男に、3年生の担任をさせるのは無理があると考えたのかもしれない。

結果的に、私にとってはこの変更がよかった。担任でない分、国語の授業にエネルギーをまわすことができた。これが担任をしていたら、なお一層よくない国語の授業をしていたかもしれない。

また、様々な仕事を手伝いながら、中学校の現場というもの、中学校の先生の仕事を理解できたことが大きかった。どの仕事に対しても、一定の距離感をもって観察できたことがよかった。何よりも3年生の進路の仕事を経験できたことが役に立った。進路に関しては、ある程度の経験が必要であり、経験がものを言う。

結局、長い教員生活の中で、「副担任」というポジションを経験したのは、この1年だけだった。後で考えてみると、どんな仕事でも、どんなポジションでも、手を抜かずに誠実に精一杯やることが大切だと思う。

仕事というものは、手伝っているうちに覚えるものである。ここ数年、学校現場でも「チーム〇〇」などと言ったりするが、昔の方がチームで動いていたような気もする。わざわざ「チーム」などと言うこと自体が、そうでなくなった証拠なのかもしれない。

国語の授業は、非常に危ういものだったが、副担任という肩書きのおかげで、多くの生徒と親しくなることができた。これも大きかった。年齢的に若いせいもあった。今では考えられないことだが、あの頃のH中学校には、20代の教員がたくさんいた。私もそのうちの一人だった。

若い分、経験はないが、とにかく動いてはいた。よく働いた。おかげで、学校には活気があった。やはり若い力は大きい。60名ほどの教職員がいたが、国語の教科部会を開くと、6人中5人が20代という状態だった。初任の先生もいたし、私のように2校目の先生が多かった。当時の先生方とは、いまだに交流がある。ある意味、同志のようなものである。

当時のH中学校は、生徒数1000人に迫るといふマンモス校だった。学年は9組までであった。これも今では考えられないことである。体育館に全校生徒が整列すると、それはそれは壮観であった。

この人数で、「大地讃頌」などを合唱すれば、これぞ大規模校の醍醐味となるのだが、如何せん歌声は響かなかった。代わりに「声を出せ」という教師の声が響いていた。授業が受け身なのである。主体性が育たない。そもそも授業で声が出ていない。表現をさせていない。それなのに、歌を歌うときだけ声が出るというのは考えにくい。

中学校勤務1年目は、その後の教員人生の糧となる1年間であった。最初はどうなることかと思ったが、1日1日、目の前のことに取り組んでいったら、何とか無事に1年が過ぎた。苦しくもあり、楽しくもあり、懐かしい日々である。人は余裕などない方がいいのかもしれない。切羽詰まった状態の方が成長できるように思う。